

対話したくなる授業づくりを通して、
社会とよりよくかかわりながら
幸せに生きる力を育む

研究校
岡谷市立岡谷北部中学校

共同研究者 **二木 治樹**
信濃毎日新聞社 NIE アドバイザー



「興味をもった記事を切り抜き、気になった部分に線を引いて、最後に感想を書きましょう」の指示で、配られた新聞を慣れない手つきでめくっていく生徒たち。「大きすぎ」「この記事はどこまで続いているの?」と思ひ思ひの言葉が飛び交っていたが、だんだん声が消え、筆を走らせる音だけが響く。「静かにしましょう」なんて声がけはいらない。“資料”との対話。

新聞スクラップが完成してくると、「どの記事を選んだ?」「交換しよう」とグループでやりとりが始まります。「友だちと意見交換してみよう」なんて声がけもいらない。“友”との対話。

3年生の歴史の授業で、太平洋戦争末期の沖縄戦で亡くなった人々を悼む「慰霊の日」に関する記事を取り上げると、「なんで沖縄に基地が集中しているのか」「現在もなんで基地問題が起こっているのか」と生徒から疑問があがりました。冷戦の影響を一通りおさえたあとで、沖縄県嘉手納町を取材した小中学生の記事を取り上げました。「基地負担って最初、基地にお金とかなにか県があたえることだと思ってたけど、ちがくて基地があることによる住民の問題点や課題点みたいな意味だった」実際を知ることから始まる“社会”との対話。

I生は手を止めてずっと考え込んでいました。他の生徒がスクラップブックを作り終え提出しだしてもまだ考え込んでいました。「なんか言葉が見つからなかった」とI生。彼女のスクラップブックは、「戦争を知らない人が増えていっている中で、このことは絶対に忘れてはいけなくて、みんなに重く受け止めてほしいと強く感じた」の言葉で締めくくられていました。“自己”との対話。

すべての答えは子どもたちの中にあります。

二木先生からのメッセージ

岡谷北部中学校の研究テーマには、「社会とよりよくかかわりながら幸せに生きる力を育む」という言葉があります。そこには、社会に関心を持ちながら学ぶ「社会人としての中学生」がいます。研究テーマを実現するために、生徒と教科学習と社会とを繋げることで、当事者意識を大切にした授業を構想しています。信頼できる情報を手掛かりに、友たちと積極的に対話しながら学びを深め続ける授業のあり方を考え合いたいと思います。



10.7[木]

当日の日程

- ①受付 8:30 ~ 8:50
- ②開会行事 9:00 ~ 9:10
- ③研究説明 9:10 ~ 9:20
- ④授業公開 9:40 ~ 10:30
- ⑤研究会 10:45 ~ 12:00
〔二木先生の講演を含む〕
- ⑥閉会行事 12:00 ~ 12:10

探究的な力を培う自己決定的学習の推進
～決める・関わる・深める～

研究校
長野市立櫻ヶ岡中学校

共同研究者 **渡辺 貴裕**
東京学芸大学教職大学院 准教授



櫻ヶ岡中学校では、本年度も教師と生徒のウェルビーイングを目指した学校づくり研究「かがや木プロジェクト」を推進しています。本研究は、授業づくりを中核に据えた学校づくりを目指し、研究テーマを「感情をゆさぶる授業づくり」と設定して、日々授業研究を楽しみながら行っています。従来の研究・研修スタイルから脱却し、教師が楽しみながら学びの本質に迫るスタイルを追究しています。特徴の1つとして「模擬授業（まえもぎ・あともぎ）」があります。授業前に生徒の反応をイメージしながら教師も学習者として授業に参加する「まえもぎ」と、授業後に参観者が学びを迫体験する「あともぎ」を繰り返すことで、教師の「学び手感覚」を磨いていきます。教師間で「私は、この活動・この瞬間がとてもわくわくした」「生徒はこの場面でこのように躡くのではないか」といった、学び手感覚に基づく対話を行うことで、教師一人一人の意識変化が生まれ、共通言語を使った対話文化の醸成を経て、最終的には学校全体の文化（ウェルビーイング）に繋がっていくことを目指しています。

かがや木PJ①（4／30）

「まえもぎ」→授業公開→「あともぎ」の順番で理科・国語の授業研究を行いました。4月に発足した新体制のもと、お互いの授業観を共有する機会が得られました。

かがや木PJ②（6／12）

校外からの先生方や共同研究者の渡辺貴裕先生にも参加していただき、学校づくりに外部からの視点を加える機会となりました。

1学期末には、生徒の背景を踏まえた理解と、居心地の良い学校づくりへの主体的な働きかけを行う職員の姿が様々な場面でみられました。この文化を土台として、2学期のかがや木PJは、より対話の「深化」を目指します。生徒の学びを本質的に捉える対話のあり方や、教師と生徒のウェルビーイングな学校づくりを、実践を通して追究していきます。10月20日の公開ではその雰囲気・文化を参加した先生方にも体感していただきたいと思います。

渡辺先生からのメッセージ

教師はどうしても、「指導はこうあるべきもの」という観念にとらわれがち。そしてそれに基づいて、見学した授業の良し悪しを判定しがちになります。授業をただ外から眺めるときには、こうした傾向が強まります。それが、自分たちで学習活動を体験してみると、見え方が変わります。生徒の姿についても、教材についても、教師の指導のあり方についても。そうした「学び手感覚」に基づいた対話を、参加者のみなさんと共に経験できたらと思います。



10.20[火]

当日の日程

- ①受付 12:50 ~ 13:15
- ②公開授業 13:25 ~ 14:15
〔技術・家庭（技術分野）2年、数学1年〕
- ③休憩 14:15 ~ 14:25
- ④研究発表 14:25 ~ 14:40
- ⑤あともぎ 14:50 ~ 15:15
- ⑥全体会 15:15 ~ 16:30

◆

目指す子ども像に迫る学び合うコミュニティとして「いっしょのじゅぎょう」の実践をひらき、子どものよさや可能性を見つめていく

▶研究者

三枝 祐紀（八坂小中）

▶共同研究者

楠見 友輔

信州大学教育学部 准教授



今、教職大学院で学び合うコミュニティ（PLC）としての学校づくりについて研究をしています。学校現場がもっと「学び合い、助け合う学校になるにはどうしたらいいのだろう？」という想いが、私の研究関心の中心にあります。研究のフィールドは、大町市立八坂小中学校。長野県で初めて、施設（校舎）は離れていますが、一つの義務教育学校になった学校です（開校4年目の途上）。今年、TOCO-TONの実践校の一つにも指定をいただいています。

学校づくりに参画する過程で、教師間の対話と協働を通じ、子どもの学びや育ちに資することを目指しています。それに向け、実践的に駆動する「ギア」として位置づけたアクション(実践)の一つが「いっしょのじゅぎょう（異年齢の学び）」です。“いっしょのじゅぎょう”を通じ、同僚の先生方とともに考え合い、目指す子ども像に迫ろうとしています。「いっしょ」には、2つの意味を込めています。1つめは、学年や発達の段階の壁・垣根を超えて、子どもたちがいっしょに学ぶことができ、それに価値があるということ。2つめは、同僚の先生同士（チーム学校）で共に、つまりいっしょに子どもを見つめ、授業づくりについて考え合い実践していくことです。岩川（2021）は、授業を「並び見る」ということについて述べています。「授業というとなみを、子どもたちと教師の、教師と同僚教師たちの、並び見の分かち合いにひらいてゆくこと。そこに授業という人間のいとなみのゆたかさを求めたい。『並び見』というのは同じ何かに共に向かう関係のこと」(岩川直樹(2021) 信濃教育「授業をひらく」より) 私はこの言葉を大切に心に留め、手がかりとして求めました。

現在、私は担任をしていません。授業をひらき見合うことを通じ、子どもの日々の姿を見とることができるのは、同僚の先生方の毎日のご実践の営みのおかげなのだ日々感じています。授業を見合ったり実践したりしながら感想(省察)を交流していると、その対話には「ありがとうございました。」の言葉が必ずと言っていいほど付いていることに気づかされます。微力ながら、大人も子どもも、互恵的に対話を重ねながら実践を進める挑戦にすることができれば幸いです。

✉

楠見先生からのメッセージ

協働的な学びでは、学びにとって重要な二つの差異が現れます。一つは、人びとが差異をその場に持ち込むことです。ティム・インゴルドが言うように、コミュニティは類似性ではなく変異によって形づくられます。もう一つは、共に学ぶことで、一人ひとりが変化していくこと。これは、ジル・ドゥルーズが言う差異化です。今回の実践を通して、子どもたちはどのように変わっていくのでしょうか。そして、その姿に出会う大人たちも、どのように変わっていくのでしょうか。

10.22[木]

⇒ 当日の日程

①受付

12：45～13：00

②開会行事

13：00～13：10

③研究説明

13：15～13：35

④授業公開

13：50～14：35

⑤研究会

14：50～16：15

⑥閉会行事

16：20～16：30

◆

物語文の「伏線」を手がかりに、物語を読み解き、対話を通して解釈を交わし合うことで、教室で文学を読み味わう楽しさや、考えを語り合う喜びが実感できる授業を目指して

▶研究者

遠山 恒輝（埴生中）

▶共同研究者

大井 和彦

信州大学教育学部 講師



昨年度より採用された伊坂幸太郎の『ヒューマノイド』には、「伏線」がたくさん盛り込まれています。教科書では伏線を「小説等において、後の展開に備えて関連する事柄を前もってほのめかしておくこと」と定義しています。これは読みを深く豊かにするための有効な手立てです。また、伏線を意識して読み進めることで、作品を繰り返し読む「再読」の価値や醍醐味もいっそう高まると考えます。

授業では、生徒が「この描写・表現にはどんな意味があるのだろう」と自ら問いをもち、自分なりの考えを構築することを出発点とします。その上で、仲間との対話を通して互いの解釈を交わし合い、物語を読み解く面白さや楽しさを実感できる授業を目指します。

「伏線」はあくまでも読解していく上での1つの手法です。ただ、今回「伏線」を学んだ生徒が漫画やアニメ、映画といった様々な作品に触れた際にも、「これは伏線かもしれない」「この登場人物が後で重要になるのでは」と自発的に考察するきっかけとなればいいと考えています。国語科での学びが、日常生活で出会った作品との面白さや楽しみにつながったり、また思考の深まりへとつながったりするといいと考えています。

信州大学の先生には「伏線」を考えるためには「頭の中で構造的に考えること」「作品をどこから見るか、どのように見えているかを確認し共有すること」の2点を助言いただきました。今後ともご指導をいただきながら、よりよい授業を目指していきます。

✉

大井先生からのメッセージ

今年度取り上げる「伏線」は、作品中の仕掛けを見つける技法として片づけられるものではありません。ある描写を前後と関係づけ、作品全体の構造を捉え直すとき、言葉や描写の意味は変わってきます。つまり、そこには自らの読みを組み替えていくという、文学を読む営みそのものがあると考えます。また、「伏線」を入口に、教室での他者との出会いによって相互に新たな視座が立ち現れることにも触れながら、ともに授業づくりを進めていきます。

10.30[金]

⇒ 当日の日程

①開会行事・授業説明

13:00～13:20

②授業公開

13:35～14:25

③授業研究会

14:45～15:25

④講演会

15:25～15:45

講師 大井和彦 先生

⑤閉会行事

15:50～16:00

◆◆

子どもたちはどう学ぶのか
～探究的な学び方の更新～

▶研究校

伊那市立伊那中学校

▶共同研究者

谷内 祐樹

信州大学教職大学院 教授



伊那中学校では、生徒自身が「やってみたい」に挑戦する探究活動「伊那中マイチャレンジ(マイチャレ)」を令和元年度から行ってきました。令和6年度からは、教科での探究的な学習に拡大し、生徒が「選択できる」ことを重視してきました。この選択の場面を「課題・目的」「内容・対象」「方法・手順」の3つの指標に分け、生徒が選択できる授業づくりに取り組んできました。

そこで本年度は、生徒が選択することで学びの更新が起こることに注目し、全校研究をスタートしました。本校が目指す「探究的な学び方の更新」とは、生徒が自ら選択することで、成功や失敗を繰り返し、試行錯誤を通して、自身の学び方を最適化していくことです。

この学びの更新が起こる場面を教師が意図的・計画的に設定する授業づくりに取り組んでいます。この授業づくりの手だてとして、「ベース」と「フレーム」という2つの言葉を取り入れました。

「ベース」は、既習の学習内容、個人や集団を通して得た経験など後に選択肢として活用できそうなものです。教師は「ベース」を教科の特性を考慮しながら、生徒全員が経験できるように意図的・計画的に授業に埋め込みます。生徒は「ベース」を参考に選択したり、その場で思いついたものを選択したりして、試行錯誤を繰り返していきます。「フレーム」は、本校の共同研究者の谷内先生から提案された「生徒が選択できる裁量を検討するためのフレーム」を指し、3つの指標を細分化したものです。例えば、「内容・対象」で、授業で扱う事象やテーマなどの「対象」、情報源や資料などの「リソース」といったものがあります。「フレーム」は、生徒が「選択」できる授業づくりを教師が行う際のとっかかりになります。現在は、提案された「フレーム」を本校らしいものとしてお見せできるように再構築に取り組んでいます。

当日は、探究活動の成果であるマイチャレ発表会と、選択して試行錯誤を通して学んでいく生徒の姿をご覧いただき、皆様と語り合えればと思います。

✉

谷内先生からのメッセージ

伊那中の先生方は、生徒の「やってみたい」を支えるために「選ぶ」ことの大切さに着眼し、授業改善を積み重ねています。日々の授業では、「これで選んだと言えるのか」「選ぶだけの選択肢は用意できたのか」「選んだことで学びは深まったのか」と、新たな問いが生まれます。先生方は「子どもはどのように学ぶのか」に立ち返り、試行錯誤しながら協働して問いに向き合っています。探究する伊那中から、多くのことを学んでいます。

11.6[金]

⇒ 当日の日程

①受付

12:30～12:50

②開会行事

13:00～13:10

③研究発表

13:10～13:25

④マイチャレ発表会

13:25～13:55

⑤公開授業

14:10～15:00

〔国語科・理科・保健体育科・家庭科〕

⑥授業者と語る会・全体会

15:00～16:20

⑦閉会行事

16:20～16:30

◆◆

単元を通して話を聞いて
要点を捉える力を高める英語授業

▶研究者

山田 裕也（屋代高校附属中）

▶共同研究者

佐藤 大樹

国立教育政策研究所 教育課程研究センター研究開発部
中学校英語 学力調査官（併任）教育課程調査官



多様な他者とのコミュニケーションにおいては、相手の考えを聞いて理解した上で、自分の考えを述べる必要があると考えています。そのために必要な聞くことの資質・能力を高める指導を充実させていきたいと考えています。

7月に行った事前授業では、「環境問題について話されている英語を聞いて、その要点を捉えよう。」という単元目標のもと、単元を通して段階的・継続的に聞くことの資質・能力を育成する授業実践を行いました。話を聞いて要点を捉えるために、具体的には、①事実や話し手の考えや気持ちを表す英語表現や、話される文章の構成および情報の位置に着目する段階的な指導、②要点が含まれる文章を聞き、要点を捉える活動を継続的に行う指導、③音読やシャドーイング、ディクテーション等を通して、英語の音声を正確に捉えるための指導を行いました。

これらの指導を行うことで、要点が明示された文章では、話し手の考えを表す表現やその表現の文章中の位置に着目しながら聞くことで、生徒はその要点を捉えることができました。一方で、複数の段落で構成された文章や、話し手の主張が繰り返されない文章では、生徒は情報を整理しながら聞くことに困難さがあるため、要点を捉えられないことがありました。

この授業を通して、メモを取り、そのメモを基にしながら文と文の関係や段落と段落の関係などを考えることで、情報を整理し、要点を捉えられるようにしていく手だてが必要であると考えました。聞こえてきた英語を単にメモするだけでなく、そのメモから場面（内容）の移り変わりを考えることで、文章の内容や形式が様々であっても、自分の力で要点を捉えられるようになってほしいと考えています。11月の授業では、生徒が自分の考えを述べるために、適切にメモを取り、そのメモを基に情報を整理することで、徐々に要点を捉える姿を目指したいと思います。

✉

佐藤先生からのメッセージ

先生方が担当される生徒の皆さんは、英語のどの領域に課題がありますか。山田先生は担当する生徒の学習状況から、「聞くこと」に課題があると考え、その指導の在り方を模索しています。相手の話を聞いて理解することは話すことと同じくらい重要ですが、指導においては「話すこと」に焦点が当たってしまいがちではないでしょうか。11月6日（金）は山田先生の公開授業を通して、「聞くこと」の指導について一緒に考えてみましょう。

11.6[金]

⇒ 当日の日程

①受付

12:50～13:10

②開会行事

13:15～13:30

③授業参観

13:40～14:35

④授業研究会

14:50～16:25

⑤閉会行事

16:25～16:30

ICT 機器を効果的に活用して、生徒自身が理解の深まりを実感できる授業づくり

研究者 田口 智一（旭ヶ丘中学校）

共同研究者 香山 瑞恵
信州大学工学部 教授



今年度は、現象の「可視化」による直感的な理解の促進と、データ分析を通じた法則性の発見による理解向上を目指し、11月11日の公開授業に向けて研究を進めています。

これまでは、信州大学香山研究室との連携のもと、沸点の計測や各種センサーを用いた光合成の比較実験に取り組んできました。具体的な数値をリアルタイムで可視化・収集することで、データの読み取り時間を大幅に短縮してスムーズな比較実験が実現でき、理科における教科の見方・考え方に迫る大きな手応えを得ました。しかしその一方で、生徒が画面上の表示数値を見るだけで満足してしまい、「なぜそうなるのか」という背景にある理由や深い考察まで至りにくい姿も見られました。データ

という明確な根拠を基に論理的に思考し、生徒が自らの言葉で説明できるようになるための指導に課題が残ったと感じています。

この反省を踏まえ、今後の事前授業および公開授業に向けて、単にデータを可視化して終わらせるのではなく「グループで根拠を出し合い、科学的な法則性を見つけ出す対話の場」の工夫を設定し、授業づくりを進めています。

11月11日の公開授業では、第3学年「エネルギーの変換と保存」の単元を行います。従来の実験ではアナログ計器の目視による指示値の判読が困難であった発電量を、ICT機器を用いて正確に測定し、リアルタイムでグラフに可視化します。おもりの重さを変えたデータを班間で比較して質量と発電量の関係という法則性を主体的に導き出すとともに、「予想した量よりも少ない量しか電気にならず、残りのエネルギーはどこへ消えたのか」について、熱や音といった根拠を互いに出し合って議論を深める姿を目指します。

デジタル計測による数値の裏にある科学的な法則を、生徒が自分たちの対話で解き明かしたという達成感を味わえたら、と考えています。確かな根拠を持って探究し、主体的に語り合いながら理科の楽しさを全員が実感できるよう、精一杯準備を進めていきます。

香山先生からのメッセージ

田口先生は本授業で、位置エネルギーと運動エネルギーの関係を可視化する実験を行います。高所から落下させたペットボトルでモーターを回転させ、生じる電流と電圧の変化をデジタル技術でリアルタイムにグラフ化。「目に見えないエネルギーの移り変わり」を視覚的に捉えます。科学の面白さにわくわくしながら、生徒たちがどのような発見や深い考察を繰り広げてくれるのか、ぜひご期待ください。

11.11[水]

⇒ 当日の日程

①受付	13:00～13:20
②開会行事	13:30～13:40
③授業公開〔3年2組〕	13:55～14:45
④リフレクションとワークショップ	14:55～16:20
⑤閉会行事	16:20～16:30

研究前半の歩みと当日に向けて

研究校 松本市立清水中学校

共同研究者 東原 義訓
信州大学 名誉教授



本校では、「私がつくる私たちの学び～子どもの自己決定を促す授業づくり～」を研究主題に、「自律」という言葉を捉え直すことから研究をスタートしました。一人でやり遂げる力としてではなく、他者に頼ったり支え合ったりする関係性の中で育つものとして「自律」を位置付け直すことは、正直なところ、私たち教員自身がまだ腑に落ちていない部分もあります。

5月には職員研修を行い、一人一台端末を「思考を深める手段」として捉え、個別に考えたことを可視

化し、対話を通して考えを練り直していく流れを確認しました。ただ、実際の授業を振り返ってみると、多くが「見える化」までにとどまり、そこから先の話し合いが単なる意見の出し合いで終わっており、「対話的な学び」に至っていないことも少なくありませんでした。生徒の問いも、単元の入り口では教師が用意したものに寄りかかりがちで、「自分の問い」として引き受けきれていない場面を、何度も目にしてきました。

こうした状況の中、教師自身の役割も変わろうとしています。知識を伝える立場から、生徒の挑戦を支える伴走者へ。ただ、どこまで生徒に任せ、どこで支えるべきか、その判断には今も迷いながら向き合っています。

11月の公開授業では、こうした前半の悩みや気づきを土台に、生徒が自分の言葉で問いを持ち、友達との対話の中で考えを広めていく授業を目指します。うまくいかない部分も含めて素直にお見せし、当日ご参加いただく先生方から忌憚のないご意見をいただければと考えています。

東原先生からのメッセージ

個別の知識の統合的な理解のためには、毎時の目標や単元展開の設定が重要と考えていたところ、企画特別部会が配布資料としてヒントをくださったのが夏休みの初めでした。とても良いタイミングでした。

しかし、どのようにすれば生徒は統合的な理解に辿り着いてくれるのでしょうか。本校チームは、クラウド活用の「対話的な学び」が効果をもたらしてくれるだろうと期待して、そこに導く「問い」を検討する日々が続いています。

11.11[水]

⇒ 当日の日程

①受付	13:15～13:30
②開会行事・授業説明	13:30～13:45
③公開授業	13:50～14:40
④感想入力	14:45～15:00
⑤東原先生講演会	15:05～16:35
⑥閉会行事	16:35～16:45

研究校

白馬村立白馬南小学校

共同研究者 蓑手 章吾

HILLOCK 初等中等部 創設 / 運営

自ら学び続ける子を支える授業改善
～白馬南小の葛藤と模索の歩み～



本校は、教育理念「子どもが創る学校～みんなで Happy ～」の具現に向け、「自ら学び続ける子を支える授業改善」を掲げスタートしました。実際のところ、「やってみる→考える」の繰り返しで、そこにはたくさんのエラーがあり、スマートな成功は 1 つもありません。「子どもに主体性を」と試みるほど、現場には葛藤が広がりました。やりたいことだけをやらせることが本当の Happy なのか。目的と手段が混同していないか。それこそ、何のための研究会参加なのか。研究会に向けた「綺麗にまとまった形式」を整えるのではなく、子どもと教員の間に生まれる生々しい問いに向き合うことこそが、白馬南小の現在地です。

上半期は、各教員が自ら選択した教科で「主体性を高めるアプローチ」について一人一研究を推進しました。子どもを上から引っ張ったり、答えを教えたりすることではなく、教員自身も探究を体験しながら、共に考える「伴走者」としての関わり方を模索しました。子ども主導という言葉に隠れがちな「ほったらかし」ではなく、躓いている一人一人にどんな言葉をかけ、表現の場や選択肢といった「足場架け」をどう設定すべきか、今までの「当たり前」を問い直す実践を重ねています。

校内協議では、常に「子どもが主語になっているか」を軸に率直な議論が交わされました。「音楽などを通して、子どもが一人でも堂々と楽しむ姿を育てたい」「日常の温かい関わり合いをシェアしたい」という願いの一方で、「形式がないと不安」「教科としての高まりをどう保障するのか」といった切実な悩みも溢れ出しました。理想を追究するからこそ生じる多様な視点をすり合わせ、日常の学校づくりをどう表現していくか、対話を重ねている最中です。

下半期は「先生方が自らの言葉で語れること」を大切に歩みを進めます。主体的な学びが「確かな学力」に結びついているかという検証も深めつつ、日々の授業や行事における伴走のあり方を共有していきます。完成形を見せるのではなく、悩み問い続けるありのままの姿を通し、子どもも教員も「みんなで Happy」になれる土台を築いていきます。

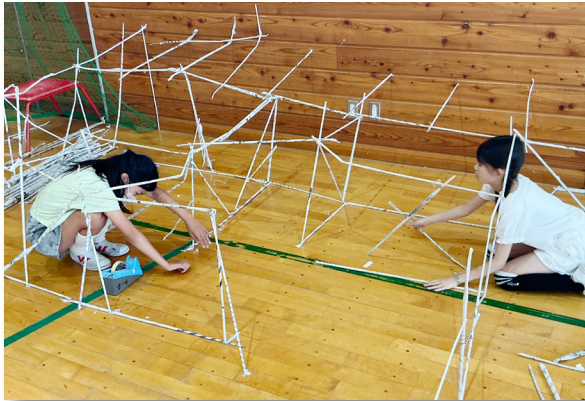
研究校

長野市立緑ヶ丘小学校

共同研究者 青山 由貴枝

長野県立美術館 学芸専門員

子どもの想像力×創造力を高める造形遊び
～図工の日を通して子どもを真ん中に置く授業～



本校では、「子どもも先生も『わくわく』を実感する学校づくり」を研究の柱に据え、日々の授業づくり・学校づくりに取り組んできました。子どもが驚きや感動、疑問から問いを生み出し、その問いを更新しながら学び続ける姿、教師も子どもとともに学び、対話を通して課題を探究する姿、そして人・もの・こととのリアルな体験を通して「学ぶっておもしろい」と実感できる姿を目指して実践を重ねてきました。中でも象徴的な取組が「図工の日」です。4 年前から、子どもたちの想像力と創造力を存分に発揮できる一日として全校で実施してきました。時間や完成作品にとらわれず、素材や空間、人との関わり

の中で自分らしい表現に夢中になる子どもの姿は、教師自身の子ども観を大きく揺さぶっています。今年度前半の実践では、3 年生の「ひも」、4 年生の「新聞紙」を使った造形遊びを通して、素材同士を組み合わせたりつなぎあわせたりして、新たな形を生み出し、そのおもしろさを友だちと伝え合う姿が見られました。一方で、形をつくること自体が目的になってしまう姿や活動時間の配分などの課題も見えてきました。「この場所で何ができるだろう」という問いかけを工夫することで、場所の特徴を生かした表現へと発想が広がることも分かってきました。また、鑑賞の際「どんな家になったか」だけでなく、「どんな感じがする家なのか」という子どもの感じ方に目を向けることで、一人ひとりの思いや価値観を見取ることの大切さを実感しています。

こうした鑑賞のあり方については、長野県立美術館学芸専門員 青山由貴枝氏よりご指導をいただき、作品を評価するのではなく、その子が何を感じ、何を考え、どのように表現したのかを理解することの重要性を学んでいます。当日は、1 年生の「図工の日」を公開し、子どもたちの表現する姿を手がかりに「そうぞうトーク」を行う予定です。子どもの姿から見てきた学びや育ち、教師自身の子ども観について語り合い、青山氏による鑑賞ワークショップを通して、「子どもを真ん中に置く授業」とは何かを参加者の皆様と共に考えたいと思います。本研究会が、これからの学校づくりや授業づくりにつながるよい時間となることを願っています。

蓑手先生からのメッセージ

Happy とは、誰かが設定した模範解答をなぞることでも、最短で評価を勝ち取ることでもありません。むしろ「Hacko- 発酵 -」にも似たプロセスのように感じます。

白馬南小学校で日々起きていることは、まさに発酵。見せかけではなく、それぞれの菌が生き生きと関わり合う中で、単体では出せない風味を醸し出す。それは時に、計画的に進めたい大人にとっては居心地悪いプロセスだったりもしますが、一人一人の Happy の芽は着実に根付いていってるなあと感じるのです。

11.17[火]

当日の日程

①受付

13：00～13：15

②全校音楽

13：20～13：35

③開会行事

13：40～13：55

④公開授業

14：00～14：45

⑤授業懇談会

14：55～15：25

⑥講演会

15：30～16：30

⑦閉会行事

16：30～16：40

青山先生からのメッセージ

対話型鑑賞は「答えを教える」のではなく、一人ひとりの見方や感じ方を大切にしながら一緒に見て話して考えていく鑑賞方法です。緑ヶ丘小学校の図工の日も、子どもたちが材料や人との対話を通して「自分らしい見方」や「新しいわくわく」に出会える時間になればと思います。つくることとみることを往復しながら、子どもたちの豊かな表現が生まれる授業を先生方と一緒に考えていきたいです。当日、多様な表現に出会えることを楽しみにしています。

11.17[火]

当日の日程

①受付

10：15～

②授業公開

10：40～11：25

[1 年生の活動は 10：00～]

③研究説明・授業研究会

11：30～12：00

④休憩

12：00～13：00

⑤開会行事・ワークショップ

13：00～15：45

研究校

「夢中」な姿から探究的な学びのヒントを探る

下諏訪町立下諏訪南小学校

共同研究者 岩川 直樹

信濃教育会教育研究所 所長

単元構想と多角的な視点から
子どもの学びの足跡をたどる



子どもが活動に「夢中」になっている姿が「探究的な学び」に向かっている表れの一つであると考え、本年度本校では、「子どもが夢中で学ぶ～探究的な学びを考える～」を研究テーマに据え、子どもが「夢中」になるために、どのような手段を講じたら良いのかを考え、「単元を通した授業構想」による授業実践を行っています。低学年部会では子どもがのめりこめる教材づくりに力を入れ、1学年の図工で対話型鑑賞を継続し行いました。多様な意見を持てるような題材を吟味し、学習カードを工夫したことにより、自分の感じたことや考えを伝え、友だちの話を聞き、異なる考えに共感したり発見したりしながら、活動に入り込む姿が見られました。中学年部会では、子どもの“やりたい”という気持ちが継続するための工夫を考えています。クラスで飼育しているヤゴの家の設計図をかく場面では、愛着のあるヤゴの写真を使って人形遊びをするように動かしながらヤゴに必要な家の環境を考えたことで、友だちと対話しながら自由な発想を繰り広げていました。高学年部会では、日々の授業の中で学びの入口となる「問い」を吟味するとともに、授業の出口で子どもがどのような「納得」に辿り着いているのかを見取ることを大切にしています。「友だちの関係」をテーマとした道徳の授業では、自分の経験や友だちとの対話を通して、授業前後で自身の考えを更新している姿が見られました。

以上の実践を継続しつつ、今は“この子”を決めて重点的かつ長期的に学びの様子を追っています。友だちや教師との関わり、クラスでの出来事など“その子”が紡いできたクラスでの物語を踏まえた、子どもの行動、つぶやきなどを教師がより多角的に見取り、生かしていくことが可能になると考えたからです。当日はそれまでの学びをふまえて、授業を参観していただいた多くの方と“その子”について分かち合う時間を設けたいと考えています。

岩川先生からのメッセージ

子どもが活動に夢中になるとき、楽しいな、おもしろいぞ、もっとやってみたいなと活動にのめり込むとき、その子どもはいまここを全力で生きている。もの・こと・ひとに全力でかわるとき、その子どもはなにかを超えてゆく。「〇〇力」がついたとか、「〇〇性」が高まったとかではない。もの・こと・ひとにかかわる、その子どものかかわりそのものが変容してゆく。そのプロセスをみんなで見守る学校づくりを共に探りたい。

11.18[水]

当日の日程

①受付	12：45～
②開会行事	13：00～13：20
③授業公開	13：30～14：15
④授業研究会	14：30～15：15
⑤講演会	15：25～16：35
講師 岩川 直樹先生	
⑥閉会行事	16：35～16：45

研究校

「松川北小学びのピラミッド」を合言葉に、

松川町立松川北小学校

共同研究者 山浦 貞一

信州大学教職大学院 特任教授

自立した学習者の歩みを支える学校づくり



本校の研究は、昨年度の授業反省から浮き彫りになった課題への危機感から始まりました。子どもたちの「聴く姿勢」は育っているものの、対話が表面的な受容に留まってしまい、互いの考えを聴き比べ、自分の考えを深めるまでには至っていませんでした。また、困難な課題に直面すると「わからない」と諦め、支援を待つ受け身的な姿が見られました。それを解決するために、自らの学びを客観的に捉え、最適に調整できる「自立した学習者の育成」を全校体制で目指しています。

自立へのステップを可視化するため、本校独自の共通言語「松川北小学びのピラミッド」を策定しました。土台に「あきらめない」、中層に「『何が』わからないかを聴こう」、頂点に「友達と考えを比べよう」を据え、全教室に掲示しています。このピラミッドは単なる目標ではなく、子どもが自身の学習状況をメタ認知することを目指しています。特に中層では、自分のつまづきを具体的に言語化し、他者の声を深く「聴く」ことで自ら学びを調整する姿勢を重視しています。

この姿は授業内に限定せず、学校生活全体の「学びの生態系」と捉え直しています。縦割り清掃での異学年の関わりや、児童会、行事等の「豊かな生活の場」での育ちが、質の高い学習を支える確かな土台となります。また、本校職員も子どものつまづきや自立に寄り添い、共に考えることができる支援者への転換を追求しています。

11月18日の研究発表会では、完成された授業を披露するのではなく、4月からの試行錯誤の中で教師と子どもがどう悩み、どう変わってきたかという“あゆみ”を提示します。授業実践をはじめ、子どもたちが自立に向かって試行錯誤している姿から「ひとりひとりが自立して学ぶために、何ができるか」を、参観者の皆様と共に深く語り合える場にしたいと願っています。

山浦先生からのメッセージ

教師が「教える人」から子どもの思考をつなぐ「伴走者」へ変わろうと歩み出した松川北小学校。目指す子ども像である「自立した学習者」の実現に向け、子どもたちが成長するステップをイメージ化した三層構造の「学びのピラミッド」を根幹に置き、ピラミッドを支えるさまざまな環境をデザインしようと動き出しています。その取組は教育の未来に向けて進化し続けるOECD発の学びの羅針盤そのものです。変化の激しい時代だからこそ、日々試行錯誤しながら歩む松川北小の実践から教師の果たすべき役割について一緒に考えたいと思います。

11.18[水]

当日の日程

①受付	12：40～13：00
②開会行事	13：00～13：10
③研究発表	13：10～13：25
④授業公開	13：30～14：15
⑤授業研究会	14：25～15：35
⑥講演会	15：40～16：25
⑦閉会行事	16：30～16：40

研究校
須坂市立須坂小学校
・須坂支援学校

共同研究者
楠見 友輔

信州大学教育学部 准教授

何気ない日常から探る
「共生社会の担い手」への可能性



須坂小・須坂支援学校では、今年度「子どもとともに
つくるインクルーシブな学校」を両校の合同テーマとし、
日々の授業づくりに取り組んでいます。校内の日常風景と
して、両校の子どもたちが廊下で挨拶を交わしたり、前
庭で一緒に遊んだりする姿があります。共に過ごすこと
が日常になっている子どもたちの世界には、既に「イン
クルーシブ」は当たり前の状況になっているのかもしれ
ません。このような子どもたちの日常を目の当たりにし、
私たちは、「共生社会実現に向け、教師には何ができるの
か」と問い続けています。

今年度で3年目となる両校での「なかよし交流」の取
組は、須坂小学校・須坂支援学校の全児童が縦割り班に分かれ、月2回程度で交流していくものです。今年
度は、子どもたちが「やりたい」と思う活動で班編成を行いました。6年生を中心に、前回の交流での振り
返りをもとに次回の活動を決めながら、班の一人一人が楽しむことができるように進めています。

また、須坂小6年松組と須坂支援学校にじ組（6年）による交流及び共同学習の機会として、4月から毎
週1時間、共に過ごす時間を重ねてきました。4月に名刺交換をして、「このゲーム、ぼくも好きだ。一緒だ」
と、同じゲームが好きな友達がいることを知った支援学校のRさんは、休み時間等にも6年松組の教室に遊
びに行くようになりました。時に気持ちがすれ違うこともあります。その都度教師も一緒に活動を振り返っ
たり、代弁したりしながら、一緒に楽しむための「インクルーシブマインド」を育てています。

学び創造研究会当日は、須坂小1年生・3年生の日々の授業場面での「インクルーシブマインド」を育む
授業の在り方、6年生及び支援学校にじ組の交流及び共同学習の実践、そして全校による「なかよし交流」
の様子3つの場面を公開する予定です。共同研究者の楠見友輔先生にご助言をいただきながら、インクルー
シブマインドを育む授業での子どもの育ちの可能性や、教師の支援の可能性について参加者の皆様と共に考
えていきたいと思ひます。

楠見先生からのメッセージ

学校は、異なる他者と出会う場であり、様々
な他者との協働は、子どもの学びを支え、豊か
にします。須坂支援学校と須坂小学校の子ども
達からは、「一緒に過ごすのが楽しい」「もっと
こうしたい」という声が聞こえてきます。差
異を楽しむ子どもたちが、
互いのよさを持ち寄りな
がら、これまでになかつ
た出来事と学びを生み出
していくことを楽しみに
しています。

11.18[水]

当日の日程

①受付	9:15～9:30	
②自由参観①	9:35～10:20	1松・3松
③共同参観	10:45～11:30	6松・にじ組
④休憩・まとめ	11:35～12:50	
⑤開会行事	12:50～13:10	
⑥自由参観②	13:20～13:40	なかよし交流
⑦休憩・まとめ	13:40～14:00	
⑧授業を語る会	14:10～15:00	
⑨授業研究会	15:05～15:55	
⑩楠見先生講演会	16:00～16:30	
⑪閉会行事	16:35～16:45	

研究者
信濃町立信濃小中学校研究部

共同研究者
佐藤 和紀

信州大学教育学部 准教授

子どもの声から授業を見つめる
～子どもと教師が共に授業を創ることを目指して～



「お兄さん、お姉さんの学ぶ姿はどうだった？」と
問いかけると、上級生の授業を参観した3年生の児
童から「かっこよかった」という言葉が返ってきま
す。一方、上級生からも、後輩が一生懸命に考えたり、
自分なりの方法で学んだりする姿から刺激を受けた
という声が聞かれます。年下の子どもが年上の子ども
の学ぶ姿に憧れ、年上の子どもも年下の子どもの
姿から学ぶ。義務教育学校だからこそ生まれる、学
年を越えた学び合いの姿が見えてきました。

信濃小中学校では、子どもの声や気付きを大切に
しながら、教師と子どもが共に授業を創ることを目指し、教師だけでなく児童生徒も校内授業研究に
参加する取組を進めています。子どもたちは他学年の授業を参観し、友達がどのように考え、どのよ
うに学んでいるのかを見つめ、気付いたことを観察記録に残します。子どもだからこそ気付く友達
のよさや学び方があり、その声は、教師にとっても授業を見つめ直す大切な手がかりになっています。

こうした取組の土台には、これまで本校で積み重ねてきた子ども主体の授業づくりがあります。子
どもたちは、一人でじっくり考える、仲間と考えを交わす、必要な情報を集めるなど、自分に合った
学び方や進め方を選択しながら学んでいます。同じ教室の中にさまざまな学び方があるからこそ、仲
間の学ぶ姿から「こんな学び方もあるんだ」と気付き、自分の学び方を広げていく姿も生まれています。

子どもたちは、友達の学ぶ姿のどこを見て、何を感じるのでしょうか。そして、子どもの声や気付
きを授業づくりに生かすことで、教師の授業の見方・考え方はどのように変わるのでしょくか。私
たちもまだ試行錯誤の途中です。当日は、目の前の子どもたちの姿を手がかりに、子どもと教師が共に
授業を創るとはということなのか、参加される皆さんと一緒に考えたいと思ひます。

佐藤先生からのメッセージ

信濃小中学校の先生方は、子どもと教師が共
に授業を創るために「子どもの声から授業を見
つめる」ことに着眼し、授業改善を積み重ねて
います。日々の実践では、「子どもは仲間の姿
のどこを見ているのか」「子どもの気付きから
授業の何が見えてくるのか」「学び方をどう広
げているのか」と、新たな問いが生まれます。
先生方は「子どもはど
のように学ぶのか」に
立ち返り、子どもと共
に問いに向き合ってい
ます。子どもを真ん中
に据えて探究する信濃
小中学校から、多くの
ことを学んでいます。

11.20[金]

当日の日程

①受付	12:30～12:50
②開会行事	13:00～13:10
③研究説明	13:10～13:30
授業公開	13:40～14:25
授業研究会	
〔説明〕	14:35～14:40
〔前半〕	14:40～15:00
〔後半〕	15:00～15:30
④佐藤先生講演会	15:40～16:30
⑤閉会行事	16:35～16:45

◆◆

“対話”が動きを変える。
仲間をみとり、技をみがき、
一人ひとりの学びが実を結ぶ体育学習

▶研究者

塩原一矢(白馬北小学校)

▶共同研究者

藤田 育郎

信州大学教育学部 准教授



体育の学習で、私たちは一人ひとりの子どもに本当に「運動の楽しさや喜び」を保障できているでしょうか。これまで私は、子どもたちに身に付けさせたい動きや学ばせたい内容を明確にし、教師が学習の流れや練習方法を組み立てながら授業を進めることを大切にしてきました。しかし、その授業は本当に目の前の子どもたちの意識や実態に合っていたのだろうか。教師が「こう学んでほしい」と考えた道筋を歩ませることが、子ども一人ひとりにとって最もよい学びになっていたのだろうか。そんな問いをもつようになりました。

子どもたちがもっている、運動経験や技能、身体感覚、得意・不得意、感じている課題は一人ひとり異なります。そして、子どもの実態が多様であるなら、運動の楽しさや喜びの感じ

方も様ではないはずです。だからこそ、教師が全ての学び方を決めるのではなく、子ども自身が自分の動きと向き合い、自分の課題を見つけ、自分に合った学び方を選んでいく体育を目指したいと考えています。そして、その学びを一人だけで完結させるのではなく、異なる課題や感覚をもつ仲間と出会い、動きを見合い、感じたことを伝え合いながら、自分の動きや考えを磨いていく。そんな学びを大切にしたいと考えています。

現行学習指導要領が大切にしている「運動の楽しさや喜びを味わう」ことを、より確かに一人ひとりへ届けたい。そのために、次期学習指導要領に向けて示されている「主体的・対話的で深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」という三つの方向性を手掛かりに、体育における「個別最適な学び」と「協働的な学び」を改めて問い直します。

授業では、仲間と課題を共有した後、一人ひとりが自分の課題を考え、自分に合った練習方法や場を選びます。ここでは、普段とは異なる仲間と出会い、動きを見たり、感覚を伝え合ったりしながら学びます。そして再び元の仲間で、それぞれが得た気づきや感覚を持ち寄り、さらに学びを深めていきます。

「自分に合った学び」と「多様な他者との学び」は、どのようにつながるのか。多様な子どもたちが、それぞれに運動の楽しさや喜びを味わう体育とはどのようなものなのか。子どもの姿を通して、これからの体育学習の在り方を皆さんと一緒に考えたいと思います。

◆◆

探検！研究！実践！佐久の未来と歴史
～教師が伴走者として自走し、
豊かに学ぶ探究学習のあり方～

▶研究校

佐久市立浅間中学校

▶共同研究者

藤森 裕治

文教大学教育学部 教授



3年生の「探検！研究！実践！佐久の未来と歴史」は、これまでの探究の経験を生かし、再度自分たちの住む地域に意識を向けて、自分の「好き」から課題を据えて、「佐久の未来と歴史」を探究する活動です。「自分の『好き』を佐久に生かす・還す」ことを目的として、地域の方と協働することを通して、「今（佐久の今、自分の今）」を考えていきます。

また、私たち教師も、「学びの自走者」として生徒に伴走することを目指します。生徒と一緒に活動したり、生徒のもっていない視点を提供したりすることで、生徒が生き生きと探究に取り組めるようにしていきます。

1学期は、教師の専門性を生かした6つの「ゼミ」（スポーツ、食、自然、芸術など）を開設し、生徒は自分の「好き」からゼミを選択し、活動しました。生徒は、問いを立てて、地域に出向いての調査活動やインタビューなど、五感を用了情報収集に取り組みました。

2学期は、活動の枠組みを「ゼミ」（専門テーマ）から「部門」（表現・実践方法）へと再編し、自分たちの探究を、地域への具体的な還元へとつなげていきます。「交流」「調査発表」「制作開発」「販売」の4部門を開設し、「今」を視点に自分のアクションを考え、所属する部門を選択します。集団を再編することにより、「好き」を越えた横のつながりが生まれ、より多様で面白い活動が生まれることを期待しています。生徒たちは、グループごとに「アクションプラン」を作成し、2学期後半（10月～12月）での地域での実践につなげていきます。そして、3学期には、1年間の学びをレポートとしてまとめていきます。

当日は、グループごとにアクションプランの内容や成果、課題をアウトプットします。これから実践するグループと実践を終えたグループが混在していると思います。参観される方々には、生徒の今後の探究活動につながっていくようなフィードバック（つっこみ）をお願いします。

✉

藤田先生からのメッセージ

塩原先生の授業は、感覚的学習の色合いが強い「マット運動」がターゲット。個々によって相違する感覚をいかにしてクラスみんなの共有物にしていくか、みんなで出し合った知恵が個に還るとき一人ひとりの学びはどんな実を結ぶのか。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」。すべての教科等において、昔から大切にされてきた考え方でしょう。今改めて、その意味合いを問い直すことが期待されていると理解したいものです。「個別最適な学び」がより豊かな「協働的な学び」を組織する。集団で学ぶからこそ個が輝く。子どもたちの「賢く鋭い対話」が飛び交う授業を期待しています。

11.26[木]

⇒ 当日の日程

①受付

13：30～13：45

②授業公開

13：50～14：35

③開会行事

14：45～14：50

④授業研究会

14：50～15：50

⑤藤田先生講演会

16：00～16：30

⑥閉会行事

16：30～16：40

✉

藤森先生からのメッセージ

県内最大規模の生徒数を誇る浅間中学校。本校ではすべての生徒が「佐久」を柱にした探究学習に取り組んでいます。各自の問題関心に応じて指導教官が配置され、ゼミ形式で個性的なテーマの学びが進められています。全員一丸となって課題に取り組む学校文化は、「浅間体育中学校」と揶揄されるほど盛んな部活動と無関係ではなさそうです。ただ最近では、この名誉ある裏の学校名が「浅間探究中学校」に改称されそうだと、先生方が笑っておられました。

11.27[金]

⇒ 当日の日程

①受付

13：20～13：40

②開会行事（放送）

13：40～

③アウトプット・フィードバック

13：50～15：35

④ワークショップ・座談会

15：45～16：45

⑤閉会行事

16：45～16：50

自分や友だちを思いやる子ども
～子どもの内におきている思いをとらえる～

▶研究者
花岡 眞子（塩田西小）

▶共同研究者 **岩川 直樹**
信濃教育会教育研究所 所長



子どもたちの言葉や行動の奥には、どんな思いがあるのだろう。日々子どもたちと過ごす中で、目に見える姿だけでなく、その内側にある思いに目を向けることを大切にしたいと考えています。

1年生の子どもたちは、友だちと関わる中で、うれしさや楽しさを感じる一方、自分の思いをうまく伝えられず、思い通りにならないと強い言葉や行動で表してしまうこともあります。その姿の内には、「本当は一緒に遊びたかった」「こうしたかった」「分かってほしかった」など、一人ひとりの様々な思いがあるのではないかと考えました。

そこで本研究では、子ども一人ひとりの思いや感じたことを大切にしながら、友だちとの関わりを通して、自分の思いだけでなく相手の思いにも目を向け、自分も友だちも大切にできる言葉や行動を選ぶ子どもの姿を目指しています。そのために、子どもたちが自然に関わり合うことのできる「遊び」を大切にしてきました。

初めは、ブロック遊びや石探しなど、一人ひとりが自分の興味のあることを楽しんでいました。しかし、遊びを重ねる中で、友だちの姿を見て「やってみたい」と感じたり、自分から「入れて」と声をかけたりする姿が増えてきました。遊びも、一人で楽しむものから、友だちと一緒に楽しむものへと少しずつ変化してきました。泥遊びや水遊びでは、友だちと言葉を交わしながら、一緒に土を掘ったり水を流したりして、遊びを広げていく姿も見られました。

一人の「やってみたい」という思いが友だちへとつながり、そこから新たな遊びが生まれていく様子から、遊びを通して子ども同士の関係も広がっていることを感じています。

これからは、個々や少人数で広がってきた遊びを、学級全体へとつなげていきたいと考えています。遊びの中で生まれる一人ひとりの思いを丁寧に捉え、その思いをつなぎながら、子どもたち自身が友だちの思いに気づき、自分も友だちも大切に作る、よりよい関わり方を探っていけるような学びを大切にしていきたいです。



岩川先生からのメッセージ

子どもが自分らしい自分をつくるためには、子どもが生きる授業の枠組をひらくことが必要になる。自分なりの仕方でものを追究し、仲間とかかわりあっていける場。そのなかでこそ現れるその子どものいまを見つめたい。絶賛成長中のその子どもが、いまなにを願い、なにを求め、なにを超えようともがいているか。そこに向ける互いのまなざしを養い合いたい。授業をひらき、まなざしを深める。そんな教育の探究を共にしたい。



11.27〔金〕

⇒ 当日の日程

- | | |
|----------|-------------|
| ①受付 | 13:10～13:25 |
| ②開会行事 | 13:25～13:40 |
| ③授業公開 | 13:45～14:30 |
| ④授業を語る会 | 14:40～15:10 |
| ⑤岩川先生講演会 | 15:10～16:20 |
| ⑥まとめの会 | 16:20～16:30 |




誰もが自分らしく楽しむことのできる体育
～みんなで楽しむターゲット型の授業づくり～

▶ 研究者 **寺川 耕平（伊那西小）**
 ▶ 共同研究者 **近藤 智靖**
 日本体育大学児童スポーツ教育学部 教授



「令和の日本型学校教育」では、多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく、それぞれの可能性を引き出す学びを実現していくことが求められています。体育においても、運動が得意な子だけが活躍するのではなく、性別の違いや障がいの有無、運動経験や技能の差などにかかわらず、すべての子どもが参加し、「やってみたい」「できた」「楽しい」と感じられる授業設計や環境づくりが必要だと考えています。

そこで、一つの提案として取り組んでいるのが「ターゲット刑」の学習です。年度当初より校内の体

「ターゲット型」の学習です。年度当初より校内の体育研究グループで実技を交えながら検討を重ね、7月に高学年で予備実践を行いました。子どもたちには、「体育はみんなのもの。運動ができる人だけのための教科ではない」と伝え、子どもたちは「全員で楽しめる新しい体育を一緒につくっていくこと」を目標に学習しました。

予備実践では、フライングディスクと校内にあったマレットゴルフセットを活用しました。子どもたちは勝敗や個人の技能向上にこだわるのではなく、学級やチーム全体の達成感を大切に、「どこをねらうか」「どのように力を調整するか」「仲間とどう工夫するか」といった思考・判断にも目を向けました。また、暑さの厳しい夏の時期でも、安全を確保しながら充実感を味わえる学習としての可能性も探っています。

「ターゲット型」が、すべての子どもに体育の楽しさや参加を保障する授業となり得るのか、本実践で、子どもたちの姿を通して、皆さんと一緒に考えていきたいと考えています。先生方の忌憚のないご意見をいただきましたら幸いです。



近藤先生からのメッセージ

現在、中央教育審議会で議論されている「次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方」の一つに、「多様性の包摂」がある。この考え方は、体育の授業においても実現されるべき重要なテーマである。

今回の寺川先生による授業実践は、まさにこの「多様性の包摂」への挑戦でもあり、「ターゲット型」といった新たな運動教材を導入することで、運動の得意・不得意にかかわらず思考を発揮しながらスポーツを楽しむ機会を保障しようとする試みである。



11.27〔金〕—

⇒ 当日の日程

- | | |
|-------------|-------------|
| ①受付 | 13:00～13:15 |
| ②体育的活動 | 13:20～13:35 |
| ③授業公開 | 13:45～14:30 |
| ④ターゲット型種目体験 | 14:30～14:55 |
| ⑤開会行事 | 14:55～15:05 |
| ⑥研究会 | 15:05～15:45 |
| ⑦近藤先生講演会 | 15:55～16:40 |
| ⑧閉会行事 | 16:40～16:45 |